

曹植の遊仙詩について―「鼎湖」の典故を手掛かりとして―

趙 美子

はじめに

「遊仙詩」とは、神仙世界を描く詩のジャンルである。曹植には十一首の遊仙詩が残っており、中にはそのまま「遊仙詩」と題する一首を除いて、ほかの十首はすべて樂府である。曹植の遊仙詩について、先行研究ではほぼ詩の寄託性をめぐって検討を行い、俗世を離れた趣を表すより、神仙世界への憧れを描くことで現実世界への不満を表すというふうに認識している。中には、曹植が基本的に一貫して神仙を信じないまま、ただ遊仙のジャンルを借りて自らの感情を表すにすぎないという観点を取ったものは多い。^①このような観点の裏には、神仙を信じることに消極的であり、信じないほうが賢明だという意識が窺えるようである。一方、前期（建安年間）は信じなかったが、後期（黄初・太和年間）になると現実中の失意により神仙に対する態度が転変したという意見もある。

また、詩の制作時期について、多くの先行研究はほぼ全作品を後期（黄初、太和年間）の作に分類しているが、まには異なる観点が見える。例えば、徐公持氏は「平陵東」を代表とする一部の作品には現実への不満が目立たず、むしろ享乐的な雰囲気漂い、しかも父の曹操の詩との関連性が見られるので、前期（建安年間）の作ではないかと述べている。^②

確かに曹植の遊仙詩には後期の作がかなり多いと思われるが、すべてを後期の作と判断するのは必ずしも正しいと

は限らない。しかも、同じ後期の作の中にも制作時期をもっと細かく考察できるものがあり、これらの詩は神仙に対する曹植の態度の変化、またその原因を理解するために意味がある。本論は以上の先行研究から啓発を受けて、曹植遊仙詩の制作時期や寄託性、また遊仙詩に見える曹植の神仙思想などの問題について検討することを通じて、曹植の作品からは時と共に神仙に対する態度に変化が見られ、特に契機となったのは曹丕の死であり、曹植は曹丕の死後、神仙世界に憧れを抱くようになったという結論を出している。

一、神仙に対する曹氏父子の態度

『魏志』華佗伝の裴松之注に引いた曹植「辯道論」は以下のように述べている。

世有方士、吾王悉所招致。〈中略〉卒所以集之於魏國者、誠恐斯人之徒、接姦充以欺眾、行妖慝以惑民。豈復欲觀神仙於瀛洲、求安期於海島、釋金輅而履雲輿、棄六驥而羨飛龍哉？自家王與太子及余兄弟、咸以爲調笑、不信之矣。

世の中に方士（仙術を行う人）があり、すべては魏王に招かれて来た。〈中略〉方士たちを魏国に集めたのは、まさに彼らがくせ者と結託して大衆を欺いたり、邪悪な行為で庶民を惑わしたりすることを恐れるためである。決して海上に神仙を探しに行ったり、立派な馬車を捨てて飛龍が引いている雲の車に乗ったりしようとするわけではない。わが父魏王から兄太子とわたしまでは、みなこれを笑い話と見なして、信じないのである。

この文章は神仙に対して曹氏父子が基本的に懐疑的な態度を持つと表明している。ただし、基本的認識が共通していても、曹操と曹植は遊仙詩を数多く作っており、少なくとも神仙の話にはなかなか興味があるようである。それに對して、完全な形で残っている曹丕の遊仙詩は「折楊柳行」一首しかなかった。以下は詩の後半を挙げる。

彭祖稱七百 悠悠安可原 彭祖 七百と称するも、悠悠として安くんぞ原ぬべけんや
老聃適西戎 於今竟不還 老聃 西戎に適くも、今に於いて竟に還らず

王喬假虛辭 赤松垂空言 王喬 虛辭を仮り、赤松 空言を垂る

達人識真偽 愚夫好妄傳 達人は真偽を識り、愚夫は妄伝を好む

追念往古事 憤憤千萬端 往古の事を追念すれば、憤憤たること千万端

百家多迂怪 聖道我所觀 百家 迂怪多し、聖道のみ我の觀る所ぞ

〔樂府詩集〕卷三十七

曹丕は詩の中で道家と神仙の伝説を複数挙げたが、すべては確信できるものではないと批判し、儒家のみが学ぶべきだとしている。ところが、『隋書』経籍志には編者を曹丕と題する『列異傳』という志怪小説集がある。中には曹丕没後の話も収録されているので、後人により編纂された、或いは後人の続編が混入した可能性は高いが、一部が曹丕の編である可能性も排除できない。従って、曹丕も神仙や道術の話に対してまったく興味がないとは言えないようである。

曹植の神仙に対する態度はより複雑だと思われる。まずは懐疑的な態度を示した作品は、「辯道論」のほかはまだ「贈白馬王彪」と「秋思賦」があり、神仙に触れた部分は以下のようなようである。

苦辛何慮思 天命信可疑 苦辛して 何をか慮思し、天命 信に疑うべし

虚無求列仙 松子久吾欺 虚無なるかな列仙を求む、松子 久しく吾を欺く

〔贈白馬王彪〕、『文選』卷二十四

松喬難慕兮誰能仙、長短命也兮獨何怨。

松喬 慕い難く 誰か能く仙たらんや、長短 命なるかな 独り何ぞ怨みん

〔秋思賦〕、『藝文類聚』卷三十五

類似した内容や表現があり、しかも背景には現実への不満や失望が読み取られる。特に「贈白馬王彪」の作成背景について、曹植本伝の裴松之注や『文選』の李善注に明確な記載が引いている。黄初四年（二二三）、曹植は白馬王曹彪、任城王曹彰とともに洛陽に朝見したが、曹彰が洛陽で突然に亡くなった。その後、曹植とともに領地に帰ろう

としても、朝廷の監察官に阻まれてできなくなつた。^③この背景で作られたこの詩は、現実への不満や曹丕への怨み言を漏らしているが、現実世界から神仙世界に逃げようとする意思は一切なく、依然として神仙を求める行為を固く批判している。

「秋思賦」も神仙になるのは不可能だと嘆き、神仙に対して懐疑的な態度を示している。ところが、賦の中の表現を「贈白馬王彪」と比べれば、類似した内容であつても全く同じ態度であるとは言えない。「天命信可疑」(天命などは信じられない)から「長短命也兮獨何怨」(人の寿命は運命に任せるしかない)まで、また「虚無求列仙」(神仙を求めるのは虚しいことだ)から「松喬難慕兮誰能仙」(神仙を求めるのは難しいので誰にもできないだろう)までの間に、確かに運命や神仙に対する態度の微妙な変化が捉えられる。趙幼文氏は『曹植集校注』の中でこの賦を太和年間、つまり晩年の作に分類している。特に明確な理由が記されていないが、ただ賦に表れた感情から見れば太和年間の作らしいと述べている。^④上述の対比によつて裏付けられるので、趙幼文氏の判断に賛成したいと考える。

このような変化を直接に記述したのは、同様に晩年の作とされる「釋疑論」である。

初謂道術、直呼愚民詐僞空言定矣。〔中略〕乃知天下之事、不可盡知、而以臆斷之、不可任也。但恨不能絕聲色、專心以學長生之道耳。

当初は道術などは、庶民を愚弄したり詐欺をしたりするものであり、確かに実現できない空言だと思ひ込んだ。〔中略〕そこで世間の物事をすべて知ることはできず、主観的な臆測で断定したことは信憑性を確保できないとようやくわかつた。ただ残念なのは道楽をやめ、専念して長生の道を学ぶことができないということだ。〔抱朴子〕内篇二 論仙)

この文は東晋の葛洪『抱朴子』に初めて見える。引用の後ろにまた葛洪の評論が続いている。

彼二曹學則無書不覽、才則一代之英。然初皆謂無、而晩年乃有窮理盡性、其嘆息如此。不逮若人者、不信神仙、不足怪也。

曹丕と曹植は学問においては何の書物でも読んだことがあり、文才においては一世に優れている人物である。しかしながら、どちらも最初には神仙が存在しないと言い、晩年になってからようやく道理や天性を深くまで追求することができたので、そこでこのように嘆いた。彼らに及ばない人たちは、神仙を信じなくても、おかしなことではないのである。

このような記載と評論から歴史人物を借りて神仙や道教を宣伝する目的が見えるが、曹植の作として「釋疑論」の真实性には疑問が残ると思われる。

しかし、曹植の多くの遊仙詩から見れば、神仙を信じる或いは神仙に憧れるような意思が確かに見られる。これらの詩はすべて後期の作とは限らず、しかもすべては現実から逃避することや解放されることだけを目的としたものとも限らないように感じられる。以下では、曹植の遊仙詩を分類し、先行作品と比較しながら分析する。

二、曹植遊仙詩の分類

まずは先行作品として漢代の楽府「長歌行」の前半を挙げる。

仙人騎白鹿	髮短耳何長	仙人	白鹿に騎り、髮短かく耳何ぞ長し
導我上太華	攬芝獲赤幢	我を導きて太華に上り、芝を攬りて赤幢を獲る	
來到主人門	奉藥一玉箱	來りて主人の門に到り、藥一玉箱を奉る	
主人服此藥	身體日康彊	主人 此の藥を服せば、身體日に康彊	
髮白復更黑	延年壽命長	髮白きも復た黒きに更わり、延年して壽命長からん	

〔樂府詩集〕卷三十

先行研究にすでに論じられた通り、このような遊仙詩は宴会での祝辞という性格、即ち「祝頌性」を持っている。宴会の主催者のために若返りや長寿の祈願をしているが、仙界に永遠に留まることではなく、人の世において長生き

できるようにと願っている。つまり神仙世界に遊ぶ想像から現実中の宴会の場に戻るのである。

しかし、曹植の遊仙詩には、このような長寿祈願があるものは半数以下であり、半数以上を占めるのは長寿祈願がないものである。先行研究にも指摘された通り、これは曹植が前代の詩人を超えて、自らの感情を込めて詠懐性のある遊仙詩を多作した結果である。それでは、曹植の遊仙詩を「長寿祈願の有無」によって分類してみると、長寿祈願があるのは「平陵東」「五遊詠」「驅車篇」「遠遊篇」「飛龍篇」の五首であり、長寿祈願がないのは「升天行」二首、「仙人篇」「遊仙詩」「桂之樹行」「苦思行」の六首である。前者の五首における長寿祈願に関わる表現を以下に挙げる。

平陵東

閶闔開 天衢通 閶闔開きて 天衢通じ

被我羽衣乘飛龍 我が羽衣を被りて飛龍に乗る

乘飛龍 與仙期 飛龍に乗りて 仙と期し

東上蓬萊採靈芝 東のかた蓬萊に上りて靈芝を採る

靈芝採之可服食 靈芝 之れを採れば服食すべく

年若王父無終極 年 王父の若く 終極無し

〔樂府詩集〕卷二十八

前述した漢樂府と比べれば、宴会の場面や他者（主人、客人など）の存在と直接関わる描写は見えない。まるで主人公が仙薬（靈芝）を食べるとそのまま仙界に留まってしまい、人の世にはもう戻らないように捉えられる。類似した現象はほかの四首にもある。

王子奉仙藥 羨門進奇方 王子は仙薬を奉り、羨門は奇方を進む

服食享遐紀 延壽保無疆 服食すれば遐紀を享け、延壽して無疆を保たん

〔五遊詠〕、『藝文類聚』卷七十八

發擧踏虛廓 徑庭升窈冥 發擧して虚廓を踏み、徑庭として窈冥たるに升る

同壽東父年 曠代永長生 壽を東父の年に同じくし、曠代 永く長生す

(一) 驅車篇)

崑崙本吾宅 中州非我家 崑崙 本より吾が宅にして、中州 我が家に非ず

(中略)

金石固易弊 日月同光華 金石 固より弊れ易く、日月と光華を同じくす

齊年與天地 萬乘安足多 年を天地と齊しくし、万乘 安くんぞ多とするに足らんや

(一) 遠遊篇)

授我仙藥 神皇所造 我に仙藥を授く、神皇の造る所なり

教我服食 還精補腦 我をして服食せしむれば、精を還らして腦を補う

壽同金石 永世難老 壽は金石と同じく、永世 老い難し

(一) 飛龍篇)、以上三首『樂府詩集』卷六十四)

以上の詩にすべては長寿祈願があるが、「主人」のためという要素は見えず、多くは「我」のためである。この現象からは遊仙詩の「祝頌性」が薄れてゆく⁶⁾ということが分かるが、もう一つの現象は、前述したように神仙世界から現実世界に戻る表現が一切ないことである。主人公が一度仙界に遊びに行くと、再び人の世に帰って長寿を保つのではなく、仙界で永生を得るような表現ばかりである。以上のような長寿祈願があり、ある程度祝頌性を持つ作品であつてもそうであるため、長寿祈願がなく、祝頌性をもつと薄れた作品はなおさら言うまでもない。この現象は曹植自身の趣向に関わると考えられ、曹植の遊仙詩では神仙世界への、主人公あるいは作者の精神の進入は、漢代や曹操の遊仙詩と比べてより徹底的なものだと言えよう。

しかし、たとえ建安時期の宴会の場で遊戯的な遊仙詩(例えば「平陵東」)を作ったことがあるとしても、曹植は

若い頃から基本として神仙を信じない態度を固く保っていた。それならば、彼はなぜ、どの時期より心から神仙世界に憧れが生じ、そこに自らの思いを託して詠懐性を持つ作品を作るようになったのか。以下ではこれらの問題について考察していきたい。

三、曹植遊仙詩の寄託性

曹植の作品には、遊仙詩のほかにも神仙との出会いや天界巡遊と関わる作品がある。前者には有名な「洛神賦」があり、後者には楚辞を模倣した「九愁賦」がある。「洛神賦」は序があるので言うまでもなく、「九愁賦」も黄初年間の現実背景が裏にあるようで、いずれも寄託性のある作品とされている。しかし、両者とも現実と緊密な関係を持っており、現実中の状況から詠い始めた上で、遊仙が終わった後に主人公は現実世界に戻ってくるのである。例えば、「九愁賦」の中の遊仙にあたる内容は以下のよう。

曠年載而不廻、長去君乎悠遠。御飛龍之蜿蜒、揚翠霓之華旌。絶九霄而高驚、飄弭節於天庭。披輕雲而下觀、覽九土之殊形。顧南郢之邦壤、咸蕪穢而倚傾。驂盤桓而思服、仰御驥以悲鳴。

曠しく年載をへて廻らず、長く君を去ること悠遠たり。飛龍の蜿蜒たるを御し、翠霓の華旌を揚ぐ。九霄を絶やして高く驚び、弭節を天庭に於いて飄す。輕雲を披りて下を觀、九土の形を殊にするを覽る。南郢の邦壤を顧み、咸な蕪穢として倚傾す。驂は盤桓して思服し、御驥を仰ぎて悲鳴す。(『藝文類聚』卷三十五)

龍に乗ることで遊仙の始まりを提示して、馬が御者に悲鳴することで現実世界に戻る過程までを完結させる。曹植はこの賦では屈原の立場を想像しながら、都を去って領地に赴かされたこと、また讒言によって罪を問われたことなど自らの遭遇と心境を綴っている。趙幼文氏はこの賦を黄初四年の作とされるようであり、少なくとも黄初年間の作というのは間違いない。「贈白馬王彪」に示したように、この時期の曹植はまだ神仙を信じない態度を持っているはずである。そのゆえ、時に作品の中に「遊仙」の内容を描いても、神仙世界にさほど憧れたわけではなく、ただ「遊

「仙」を借りて一時的に現実世界から脱出して理想世界を求めたに過ぎない。しかも、神仙世界のような理想的な別世界があればそこに行きたいというより、神仙世界中の不老長寿や自由などの理想的な要素を現実世界に実現させたいという思考が読み取られ、それは黄初年間までの「遊仙」の趣旨に相応しいと考えられる。

従つて、曹植のもつと本格的な遊仙詩の詩作は、ほぼ文帝曹丕の没をきつかけに太和年間から始まったのではないかと推測したい。一部の遊仙詩に描かれた仙界に遊ぶ描写は、実際には兄曹丕の後についてこの世を去るということの浪漫的な表現であらうと思われる。以下は、帝王の崩御に関わる「鼎湖」故事の多用と、ほかの作品にも見える君主のための殉死も含まれた自滅の意思との両者を合わせて、曹植遊仙詩の寄託性を検討する。

(一)「鼎湖」典故の多用について

鼎湖とは、伝説によれば上古の帝王の軒轅氏、即ち黄帝が龍に乗つて天に昇つたところである。それについての記載は『史記』『封禪書』に見える。

黄帝采首山銅、鑄鼎於荆山下。鼎既成、有龍垂胡髯、下迎黃帝。黃帝上騎、群臣後宮從上者七十餘人。龍乃上去、餘小臣不得上、乃悉持龍髯、龍髯拔墮、墮黃帝之弓。百姓仰望黃帝既上天、乃抱其弓與胡髯號、故後世因名其處曰鼎湖、其弓曰烏號。

黄帝は首山の銅を掘り、荆山の下で鼎を鑄造した。その鼎が出来上がると、一匹の龍がひげを垂らしており、天上から降りて黄帝を迎えに来た。黄帝は龍の背に乗ると、七十数人の臣下と后妃が黄帝に従つて龍に乗った。そこで龍は飛び上がつて、ほかの地位の低い臣下は龍に乗れず、みな龍のひげを引つ張つていた。龍のひげと、黄帝の弓とも地面に落ちた。庶民たちが仰ぎ見ると、黄帝はすでに天に昇ってしまったので、その弓とひげを抱いて悲しんで叫び泣いた。そのゆえ、後世の人々はその地を「鼎湖」と、その弓を「烏号」と名付けた。

これはもちろん現実世界で発生した事実ではなく、偉い人の死を言うのを忌み、或いはその死に伝奇性を持たせたいため、死んだわけではなく天に昇つて神仙になつたなどと古の人々が想像したのである。

確かに「鼎湖」の典故には神仙になるというめでたい要素を有しているが、六朝までの用例を調べると、ほかの遊仙詩にはあまり用いられず、ほぼ帝王の死を喩えて言う場合のみに用いられている。以下は鮑照と庾信の詩の用例を挙げる。

虎變由石紐 龍翔自鼎湖 虎変するは石紐に由り、龍翔するは鼎湖自りす

〔鮑照〕「從過舊宮」、『鮑明遠集』卷五

鼎湖去無返 蒼梧悲不從 鼎湖 去りては返ること無し、蒼梧 従わざるを悲しむ

〔庾信〕「擬詠懷詩二十七首」其二十三、『庾子山集』卷三

鮑照詩は宋の武帝劉裕の故郷の彭城によぎった時の作であり、生前に建てられた宮殿を参拝して武帝の功績を追慕している。^⑧「虎變」は虎の入り乱れたしま模様のように変幻することであり、ここでは王朝交替、即ち劉宋王朝の樹立を喩えている。「石紐」は禹の出生地とされ、ここでは武帝の故郷を言う。従って、「鼎湖」の典故も武帝を上古の聖王に擬え、黄帝の昇天を借りて武帝の死を詠っていると理解するのは妥当である。

庾信詩は清の倪璠の注によれば、梁の元帝が西魏との戦いに敗れて殺害されたことを背景としている。黄帝は鼎湖で世を去つてからまた帰ることがなく、舜が蒼梧に葬られる時、一人の妃は従うことができなかつた。この二句から、元帝の死を偲び、さらに殉死できないことを悲しんでいる作者の心境が読み取られる。^⑨

以上二首の詩はどちらも「鼎湖」を用いて、当時の帝王の死を黄帝の昇天に喩えて詠う例であり、類似した用法は唐以後の詩にも見られる。さて、曹植遊仙詩における「鼎湖」の典故を以上と同じように理解すればよいのか。以下は「鼎湖」の典故に触れた「驅車篇」「仙人篇」「遊仙詩」三首の詩を分析する。

驅車篇

驅車擲駑馬 東到奉高城 車を駆りて駑馬を擲ち、東のかた奉高城に到る
神哉彼泰山 五嶽專其名 神なるかな彼の泰山、五嶽 其の名を専らにす

隆高貫雲霓 嵯峨出太清

隆高として雲霓を貫き、嵯峨として太清より出ず

周流二六候 間置十二亭

周流して二六候、間に置く十二亭

上有涌醴泉 玉石揚華英

上は涌醴泉有り、玉石 華英を揚ぐ

東北望吳野 西眺觀日精

東北のかた吳野を望み、西のかた眺めて日精を觀る

魂神所繫屬 逝者感斯征

魂神の繫屬する所、逝者 感じて斯に征く

王者以歸天 效厥元功成

王者 以て天に歸し、厥の元功の成るを效す

歷代無不遵 禮祀有品程

歷代 遵わざること無く、禮祀 品程有り

探策或長短 唯德享利貞

策を探りて或いは長短あるも、唯、た德のみ利貞を享く

封者七十帝 軒皇元獨靈

封ずる者 七十帝、軒皇 元より独り靈なり

餐霞漱沆瀣 毛羽被身形

霞を餐いて沆瀣に漱ぎ、毛羽 身形を被う

發舉蹈虛廓 徑庭升窈冥

發舉して虚廓を踏み、徑庭として窈冥たるに升る

同壽東父年 曠代永長生

壽を東父の年に同じくし、曠代 永く長生す

〔樂府詩集〕卷六十四

三首の中でこの詩だけが「鼎湖」二字を表に出していないものの、その内容をもっとも詳しく描いている。詩は泰山の自然景色から詠い始めて、中頃は古の封禪の礼に触れるが、そこから封禪をした上古の帝王の代表として軒轅黃帝の話を引き起こして、最後は黃帝昇天の故事で締め括る。曹植のほかの遊仙詩と違って、この詩は特定の政治事件に関する可能性がある。黄節は、この詩は太和年間の封禪をめぐる朝議に関わると述べている¹¹。また曹植は太和三年（二二九）に東阿に国替えされてから、近くにある泰山に行くことができるので、これは太和三年以降の作であると考えられる。

結局曹魏時代の終わりまで封禪は行われなかったが、曹植のこの詩には明帝曹叡に封禪を勧めるような意味が窺われる。それだけではなく、封禪や黃帝（「軒皇」）に関する描写は、恐らく裏では亡き文帝曹丕にも関わりがあるで

あろう。まずは「王者以歸天、效厥元功成」二句は、「文帝諫」の「方隆封禪、歸功天地」二句の内容と近い。曹丕が自ら泰山で封禪を行ったというわけではなく、古の聖王に準じて「かつて封禪しようとしていた」と、曹植は想像しているのである。従ってこの詩の場合でも、ひそかに曹丕を封禪も昇天もできた黄帝に喩えていると考えることは可能であろう。もしそうであれば、曹叡に封禪を勧めることには、古の聖王に倣うことに、先帝の「遺志」を継ぐためという理由を重ねて、その正当性と必要性の重みが増すこととなる。

仙人篇

仙人攬六著	對博太山隅	仙人	六著を攬り、對博す	太山の隅
湘娥拊琴瑟	秦女吹笙竽	湘娥	琴瑟を拊し、秦女	笙竽を吹く
玉樽盈桂酒	河伯獻神魚	玉樽	桂酒を盈たし、河伯	神魚を獻す
四海一何局	九州安所如	四海	一に何ぞ局なる、九州	安くにか如く所ぞ
韓終與王喬	要我於天衢	韓終と王喬と、我	を天衢に要つ	
萬里不足步	輕舉凌太虛	万里	歩むに足らず、輕挙して太虚を凌ぐ	
飛騰踰景雲	高風吹我驅	飛騰して景雲を踰え、高風	我が驅を吹く	
廻駕觀紫微	與帝合靈符	駕を廻らして紫微を觀、帝と靈符を合わす		
閭闔正嵯峨	雙闕萬丈餘	閭闔	正に嵯峨たり、双闕	万丈余
玉樹扶道生	白虎夾門樞	玉樹	道を扶けて生じ、白虎	門樞を夾む
驅風遊四海	東過王母廬	風を驅りて四海に遊び、東のかた王母の廬に過る		
俯觀五嶽間	人生如寄居	俯して五岳の間を觀れば、人生	寄居するが如し	
潛光養羽翼	進趣且徐徐	光を潜めて羽翼を養い、進趣	且らく徐徐たり	
不見昔軒轅	升龍出鼎湖	見ずや	昔の軒轅の、龍升りて鼎湖より出ずるを	

徘徊九天 上 與爾長相須 徘徊す 九天の上、爾と長えに相い須たん

〔樂府詩集〕卷六十四

冒頭の六句に描かれた場面は、神仙の要素を除けば、まさに公宴詩と同じようである。類似した表現は「五遊詠」にも見える。後半の「人生如寄居」は、曹丕「善哉行」の「人生如寄、多憂何爲（人生 寄するが如し、多く憂うるも何をか為さん）」〔文選〕卷二十七）と同じように、「古詩十九首」其の十三「驅車上東門」の「人生忽如寄、壽無金石固（人生 忽として寄するが如く、壽に金石の固き無し）」〔同卷二十九）という表現を踏んでいる。ただし、「驅車上東門」の最後は神仙を求めるより現実世界で享樂するほうがよいと詠じ、「善哉行」も享樂を勧めるが、曹植はここで前人の意を逆にして用い、ぜひ現実世界を捨てて神仙世界を求めに行きたいという願望を語っている。

注目すべきは「與帝合靈符」と最後の四句の表現である。まずは「與帝合靈符」について趙幼文氏は、「帝」は天帝のことで、「符」は諸侯が天子に朝見するときの身分の象徴であり、神仙世界なので「靈符」と呼ばれると解釈している¹¹。確かに現実には曹植は魏の諸侯であり、天界に行っても依然として諸侯の身分で天帝に朝見できるといっている。現実中の身分に準えて神仙世界での身分を想像したからであろう。

また最後の四句にも「鼎湖」の典故を用いる。屈原「遠遊」に「軒轅不可攀援兮、吾將從王喬而娛戲（軒轅に攀援すべからず、吾は將に王喬に従いて娛戲せん）」とあるように、軒轅黄帝に従つて仙界に遊ぶのは、後世の人々にとつては容易に望めることではないはずである。しかし、この詩には「軒轅」が天上に「爾（主人公）」を待っているという異例な表現を呈し、主人公と「軒轅」の間に親しい特別な關係を有しているように描かれている。これもまた現実に準えて神仙世界を想像したからであろう。このことから後世の例ながら、李白の「廬山謠寄盧侍御虛舟」に「先期汗漫九垓上、願接盧敖遊太清（先ず汗漫と期す九垓の上、願わくは盧敖に接して太清に遊ばんことを）」〔分類補註李太白詩〕卷十四）と、現実中の友人の盧虛舟を古の仙人の盧敖に喩えて、ともに仙界に遊ぼうと友人を誘っていることを想起させる。この例を踏まえるならば、曹植詩の中の「天帝」と「軒轅」は、いずれも亡き兄曹丕の喩えではないかと思われる。

思うに、漢魏の時代に流行っていた五行説によれば、火徳の後漢を継承した魏王朝は、ちょうど火徳の炎帝に戦勝した黄帝と同じように土徳にあたる。また、『魏書』明帝紀に以下の記載がある。

太和元年春正月、郊祀武皇帝以配天、宗祀文皇帝於明堂以配上帝。

太和元年春正月、洛陽の南郊で武帝を天とともに祀り、明堂で文帝を天帝とともに祀る。

従つて、曹植が遊仙詩で曹丕を黄帝や天帝に喩えるのは、政治面から見ても正当な理由がある。

遊仙詩

人生不滿百	戚戚少歡娛	人生	百に満たず、戚戚として歡娛少なし
意欲奮六翮	排霧陵紫虛	意	六翮を奮わんと欲し、霧を排して紫虚を陵ぐ
蟬蛻同松喬	翻跡登鼎湖	蟬蛻すること松喬と同じ、跡を翻して鼎湖に登る	
翱翔九天上	騁轡遠行遊	翱翔す	九天の上、轡を騁せて遠く行遊せん
東觀扶桑曜	西臨弱水流	東のかた扶桑の曜きを觀、西のかた弱水の流れに臨む	
北極登玄渚	南翔陟丹丘	北を極めて玄渚に登り、南に翔けて丹丘に陟らん	

〔藝文類聚〕卷七十八

この詩は「遊仙詩」と題する歴代の詩においても最も古いものであるが、『文選』遊仙類には収められなかった。もしかしたらそもそも詩題がなく、或いは詩題が失われた詩であり、後人によって内容から「遊仙詩」と名付けられた可能性もある。「鼎湖」の典故を用いた表現は、「蟬蛻同松喬、翻跡登鼎湖」二句である。「松喬」は仙人の赤松子と王子喬のことで、前述にも触れたように遊仙の作品によく登場する人物である。「松喬」に倣つて仙人になりたいというの一般的な表現であるが、もし黄帝に倣つて「鼎湖」で天に昇りたいというのは、天子の身分でない限りは相応しくない表現であろう。それゆえ、「翻跡登鼎湖」を黄帝の臣下に倣つて自らの君主について天に昇りたいと理解したほうがより適当である。つまり、この表現はまた「仙人篇」の最後の四句と同じように、神仙になつたとされる

黄帝で亡くなった曹丕を喩えて、黄帝について天に遊ぶことであの世で曹丕との再会を喩えていると考えられる。

(二) 殉死意思の表現について

実際のところ、以上で論じた遊仙詩だけではなく、曹植のほかの作品にも君主への殉死に関わる内容が見える。まずは『魏志』文帝紀の裴松之注に引いた「文帝誄」の中で、曹丕のあとを以てて殉死したいことを直接表明している。承問恍惚、惛惛哽咽。袖鋒抽刃、欲自僵斃。追慕三良、甘心同穴。感惟南風、惟以鬱滯。終於偕没、指景自誓。問を承けて恍惚たり、惛惛哽咽す。鋒を袖にして刃を抜き、自から僵し斃れんと欲す。三良を追慕し、甘心して穴を同じくせんとす。南風を感じて惟れば、惟以て鬱滯す。偕に没するに終らんことを、景を指して自から誓う。「南風」は、『詩経』『凱風』の「凱風自南、吹彼棘心。棘心夭夭、母氏劬勞（凱風南よりし、彼の棘心を吹く。棘心夭たり、母氏劬勞す）」を典拠とし、母のことを指して言う。「三良」は、秦の穆公に殉死した三人の賢臣である。つまり古代の賢臣に倣って殉死しようと思つたが、母のことを考えると生き続けなければいけない。しかし、きつといつかあの世についていくと、日に向かつて誓つた。

思恩榮以橫奔兮、闕關塞之嶢崢。顧衰絰以輕舉兮、迫關防之我嬰。欲高飛而遙憩兮、憚天網之遠經。願投骨於山足兮、報恩養於下庭。慨拊心而自悼兮、懼施重而命輕。嗟微軀之是效兮、甘九死而忘生。幾司命之役籍兮、先黃髮而隕零。

恩榮を以て以て横奔するも、闕塞の嶢崢たるに閱さる。衰絰を顧みて以て軽く挙るも、関防の我に嬰うに迫らる。高く飛びて遙かに憩わんと欲するも、天網の遠く経るを憚かる。遙かに骨を山足に投じ、恩養を下庭に報ぜん。慨として心を拊ちて自から悼み、施の重くして命の軽きを懼る。嗟微軀の是に効し、九死に甘んじて生を忘る。幾わくば司命の役籍にかかり、黄髮に先んじて隕零せんことを。

朝廷の禁令によつて、曹植は都に弔問することもできなかつた。この段落では兄の死への悔やみと殉死の意思を重ねて綴っている。特に現実の束縛から脱出して都に赴きたいという願いを表現するのに、遊仙詩に多用される「輕舉」

と「高飛」の語を用いている。この点は注目すべきである。

誄は一般的に抒情より公的文章の性格が強く、内容と形式双方ともに一定の規則に従うべきものであるが、「文帝誄」は同じ曹植作の誄の中でも特別な存在だと言える。「武帝誄」と比べてみればその違いが際立っている。「文帝誄」は前述のように、最後に楚辞体で書かれて個人的感情を語った長い部分があるため、劉勰に以下のように指摘された。

陳思叨名、而體實繁緩。文皇誄末、百言自陳、其乖甚矣。

陳思王曹植は世に名高いが、その文章の書き方は実際のところ細かすぎて洗練されていない。「文帝誄」の最後に、百字ほどで自らのことを述べるのは、(誄の作成規則に) 重大な違反である。(『文心雕龍』誄碑第十二)

一方、『武帝誄』は曹植作のほかの誄と同じようにほほきちんとした四字句で綴られている。内容から見れば、君主の功績を大いに称えたり、その崩御を悲しんだりした内容は「文帝誄」と共通しているが、「文帝誄」の際立ったために、常識的な書き方や規則を破っても構わないようである。

ほかに、殉死の故事を詠った「三良詩」がある。

功名不可爲 忠義我所安 功名 為すべからず、忠義 我の安んずる所なり

秦穆先下世 三臣皆自殘 秦穆 先に下世し、三臣 皆な自ら残こころなう

生時等榮樂 既沒同憂患 生ける時は榮樂を等しくし、既に没しては憂患を同じくす

誰言捐軀易 殺身誠獨難 誰か言う 軀を捐つるは易しと、身を殺すは誠に独り難し

攢涕登君墓 臨穴仰天歎 涕を攪りて君の墓に登り、穴に臨みて天を仰ぎて歎く

長夜何冥冥 一往不復還 長夜 何ぞ冥冥たる、一たび往きて復た還らず

黃鳥爲悲鳴 哀哉傷肺肝 黃鳥 為に悲鳴す、哀しきかな 肺肝を傷ましむ

〔『文選』卷二十一〕

この詩は一般的に建安年間、曹操の遠征に携わって秦の穆公の墓によぎった時の作とされ、秦の穆公に殉死した三人の忠臣を褒め称えている。

さらに、もし「殉死意思」を「自滅意思」に拡大すれば、もっと多くの作品が挙げられる。例えば、曹植伝の裴松之注に引いた「吁嗟篇」があり、その結尾は以下のようなものである。

願爲中林草 秋隨野火燔 願わくは中林の草と爲り、秋 野火に随いて燔かれんことを

糜滅豈不痛 願與株荜連 糜滅するは豈に痛ましからざらんや、願わくは株荜と連ならんことを

この詩は注として本文の太和年間の内容に付けられているので、一般的に太和年間の作とされる。曹植は「転蓬」（風に吹かれて漂うムカシヨモギ）よりは根のある草になりたいと願い、たとえ火に焼かれても構わないことを詠じ、身を滅ぼしても都に帰りたいという自らの悲願を訴えているようである。¹²⁾

このような自滅意思は後期の作品のみに見られるわけではなく、若い頃の曹植にはすでに備わっている。例えば、建安十六年（二二一）の「離思賦」には、

念慈君之光惠、庶沒命而不疑。欲畢力於旌麾、將何心而遠之。

慈君の光惠を念い、庶わくは命を没しても疑わざらんことを。旌麾に於いて力を畢さんと欲し、將に何心か之れに遠ざからん。（『藝文類聚』卷二十一）

とある。その年、二十歳の曹植は曹操に連れられて遠征に赴いた。この賦では、父の恩に報いるために、甘んじて戦場で討ち死にしても構わないという自己犠牲の意思を表している。

おわりに

以上を通じて、曹植遊仙詩の一部に曹丕への殉死意思が窺われるという結論を出した。この過程において「鼎湖」の典故は重要な手がかりである。そもそも神仙世界への興味は、堂々と神仙を信じないと宣言した若い頃から、すで

に曹植の心の中にあつたと考えられる。しかし、ただの笑い話とする態度から深く信じるようになったのは、恐らく曹丕の死をきっかけにしたのであろう。さらに言えば、客観的に存在するか否かに関わらず、神仙世界に憧れるようになったと言えよう。前述した通り、曹植は遊仙詩の中で曹丕を黄帝に擬えて想像していると考えられる。彼にとつて曹丕について死にそなつた自分は、まさに龍に乗りそなつた黄帝の臣下の立場と同じである。それゆえにこそ、遊仙詩の中で何度も黄帝昇天の故事を詠い、それによつて兄曹丕が行つた、そしていづれ自分も行くあの世界を、期待を抱いて想像したのではないか。たとえ現実には神仙世界は存在しないとしても、曹植は詩の中で神仙世界を作り出すことによつて、現実では叶えられない願いや届かない思いを託すことができたのである。

注

- (1) 例えば、矢田博士氏は「曹植の神仙樂府について——先行作品との異同を中心に——」(『中国詩文論叢』九、二七〜四三頁、一九九〇年)の中で、曹植の「神仙不信」の態度は「基本的に、終生一貫したものであつたと考えてよいであろう」と述べている。
- (2) 徐公持「曹植詩歌的寫作年代問題」(『文史』六、一四七〜一五八頁、一九七九年)。ただし、同氏はのちの『曹植年譜考証』(社会科学文献出版社、二〇一六年)の中で前述の意見を保持していなかつたようである。
- (3) 序の原文は以下のよう。

黄初四年五月、白馬王任城王與余俱朝京師、會節氣。到洛陽、任城王薨。至七月、與白馬王還國。後有司以二王歸藩、道路宜異宿止、意毒恨之。蓋以大別在數日、是用自剖、與王辭焉、憤而成篇。
- (4) 趙幼文『曹植集校注』(中華書局、二〇一六年、七〇六頁)。
- (5) これについて、王小盾、金溪「魚山梵唄傳說的道教背景」(『中國文化』三六、一三四〜一五七頁、二〇一二年)の「六 關於曹植形象的宗教化」には詳しい論述がある。
- (6) 中野 将「曹植『遊仙詩』考——その『詠懷性』について——」(『中國文化』五二、二八〜三九頁、一九九四年)。同論には

「詩を賦する行為が集團のものから個人的な営みへと移行するに従って、作品の制作目的が変化し、『祝頌性』が薄れてゆく」とある。

(7) 『淮南子』原道訓の高誘注によれば、「鳥」は「於」に通じ、「鳥號」は「ここに於いて号さけぶ」という意味である。原文は以下のよう。

一 說黃帝鑄鼎於荆山鼎湖、得道而仙、乘龍而上、其臣援弓射龍、欲下黃帝、不能也。鳥、於也。號、呼也。於是抱弓而號、因名其弓爲鳥號之弓也。

(8) 鮑照詩の解釈については、錢仲聯『鮑參軍集注』(上海古籍出版社、一九八〇年)三〇三頁を参考した。

(9) 倪璠注に「言魏人戕帝時已在長安、不能從君死也」とある。

(10) 黃節『曹子建詩注』(中華書局、二〇〇七年)一六四頁には、「明帝太和中、護軍蔣濟上書曰、宜遵古封禪。(中略)子建此篇、或當時作也」とある。

(11) 趙幼文前掲書、三二九頁。

(12) 類似した例は、川合康三「身を焼く曹植」(『三国志研究』一、三〇一六頁、二〇〇六年)に数多く挙げられている。